アーティストインタビュー
井伏銀太郎さん

—よろしくお願いいたします。仙台で銀さん、もうずっと長くされていますが、まず子どもの頃から、どういう子どもだったのかとか、あと演劇とかそういう芸術にどういうふうにして入っていったのかというところをぜひお聞きできれば。

井伏：どういう子どもだったかっていうと、やっぱり目立ちたがり屋っていうか、小学校とかあんまりあれだったけども、中学校に入ったら、放送部でもないのに DJ をやったりとか、お昼の放送に、あとは学芸会で漫才とかをよくやってたんですよ。それで人前で何かやるのが面白いなと思ってて。小学校、中学校と親友だった人がいたんですけども、彼と本当にもう大親友で、同じ高校をめざしてたんだけども、ちょっと彼は受験に失敗って言ったらあれだけども、育英高校に入ったんですよ。で、それで私は仙台高校に入って、仲の良かったシモマタくんっていう人が高校演劇の演劇部に入って、その頃は合同公演っていうものがあったんですね。昔は男女別学で、男子と女子が一緒にやる企画がないので、演劇協議会っていうので年に 1 回 2 本、全部の高校が集まって合同公演っていうのが昔あったんですよ。その公演の主役に 1 年生で抜擢されて。私はブルース・リーに憧れて少林寺拳法やってたんですね。高校 1 年生の時は。それで、彼の芝居を観て衝撃を受けて、本当に一緒に今まで仲良くやってた人がまるで別人のように、宮城県の県民会館の大きな舞台で主役を張ってたっていうのにすごく衝撃を受けて。

自分もやってみたいなって、こんなすばらしい表現っていうことで、高校 2 年の時に仙台高校の演劇部に入ったんです。で、仙台高校はその頃ずっと男子校で、私が最後の男子校の時代だったんですよ。私の 1 つ下から男女共学になって、そこにいろいろ女子が入ってきて演劇も盛り上がったっていうような、そういう感じですね。だから演劇をやるきっかけっていうのは大親友の高校演劇の舞台を観て感激して、自分もやってみたいなと思って入ったっていうのがきっかけです。

—20 代、30 代、40 代、50 代、その間に本当にご自分で劇団を作られたりとか、クオータースタジオを作ったりとか、震災があったりとか、さまざまなことがあ

ったと思うんですけども、そのそれぞれなんか、思い出、エピソードというか。

井伏：そうですね。とにかく I.Q は、旗揚げ当時は 30 名ぐらいいたんですよ。とにかく高校演劇を卒業した連中、芝居をやりたくて、でもなんていうか新しいものをやりたいっていう連中が 30 人ぐらい入って、そこから最初は劇団じゃなくてプロデュースチーム、I.Q150 っていう、劇団制にするとどんどん膠着してしまうから、常に新しい血を入れてっていうのかな、そういうプロデュースでやろうっていうことで、それで何回かプロデュースチームとしてやって。でもやっぱりこのぐらい固まってきたら劇団にしてやろうということで、ちょっと何年かは忘れたんですが劇団に変えたっていうのがその当時でしたね。それからとにかく 10 年間はずっと地元でやってたんですよ。I.Q150 って。

初めての地方公演が山形の寒河江映画劇場っていう映画館で。それは平田オリザさんがアゴラ劇場を作ったばっかりの頃、とにかくアゴラで公演をやってもらう人を探したいっていうことで、リュックサック 1 つ背負って全国の劇団を旅して回ってたんですね。で、たまたまいろいろ調べて I.Q の稽古場に平田オリザさんが来て、公演を観て、ぜひ大世紀末演劇展っていうのを、その当時平田さんが企画していて、それに出演してくれってことで。記録をしっかり調べないとあれなんですけども、仙台から初めてそういう東京の有名な劇場でやるっていうことで、その当時、東北放送と NHK の 2 社が取材に来ましたね。仙台の劇団が初めて東京でやるっていうことで。お客さんにインタビューして「どうですか？」って、「東京の芝居と変わらないぐらいすばらしい」って。それどういう意味なのかなってあったんですけども。

で、初めて東京にいた時に、平田オリザさんも来てくれて、丹野久美子のことを宮城の緑魔子だとかって書いてくれて。で、東北の純粋培養劇団ということで、どこの影響も受けてない、本当の完全なオリジナルの芝居を東京に持ってきたっていうことでかなり褒めてくれたっていうか。その時にアゴラ劇場の最多入場記録っていうのを更新したんですよね。今までは出川哲朗さんって、今はタレントになってるけれども、ウッチャンナンチャンとシャララっていう劇団をやってたんですよ。そこがアゴラ劇場の一番の動員記録だったんだけども、I.Q が 114 名、定員が 45 名だったんですね。その当時。そこでスタッフ室からキャットウォークまでお客さん入ったっていう。そういうので、初めて I.Q が行ってかなり評判を取ったっていうのがあって。そのあと六面座さんが三百人劇場

でやったりとか、十月劇場が松本現代演劇フェスティバルかな、そういうところに行って、仙台の劇団がどんどんオリジナルをいろんなところに出していくっていうことになりましたね。それが 10 年目ですね。俺が 30 ぐらいの時に。
東京に行く機会も少なくなって、I.Q 自体も公演を年に数回しかやらなかったりとか、丹野が、ちょっと東京に行ったりとかして。

それで、本当に演劇の公演ができない状態がかなり 2 、3 年続いたんですよ。その時に俺が 40 ぐらいで、丹野が東京に行ってるんで、銀ちゃんが自分で作・演出とかプロデュースしたいんだったら、I.Q は私が作・演出じゃなくてもいいから、やりなさいよと丹野に言われたけどもそれは恐れ多くて、井伏銀太郎プロデュースということで、I.Q の名前じゃなくプロデュース公演ということで、初めて『ROUGE』という作品をその I.Q の女優と 2 人で 2 人芝居をやりましたね。

そういう 42、40 ちょっと過ぎた時に個人プロデュースを立ち上げて、それからなんていうのか、I.Q の公演も少なくなってきたんで、その時やっぱり自分の死というものをちょっと考えて、これから 40 を過ぎてあと何年俺は芝居できるんだろうと思って、30 年、40 年ぐらいなのかなって考えた時に、やっぱり本当に、自分のやりたい時にやりたい芝居をやりたい仲間と一緒に作っていきたいなという思いがすごい強くなってきたんで、そうやって自分で作・演出とかやるんだったら、独立して自由にやったほういいんじゃないって、茅根から言われて、そうだなということで。ただ、辞めた時は仲間もいないし、『ROUGE』っていう自分の初めて書いた作品、1 冊しかなかったんですよ。でもやっぱり色彩シリーズはこれから、Gin’s Bar という、なんていうか、劇団を、劇団っていうかプロデュースチーム、私の個人プロデュースで Gin’s Bar という。その頃、「Ryu’s Bar」という村上龍のラジオ番組が結構やってたんですよ。かっこいいなと思って。で、そうやって、Ryu’s Bar が毎回ゲストを迎えて放送してたんで、そういう感じで Gin’s Bar も毎回ゲストを迎えて作品できるようにしたいなと思って。その時に 1 回目に演出してくれた西澤に声をかけて演出をやってくれっていうことで。それ以外も二十何年間ずっと演出をやってくれてますね。俺が出る作品は。

だから考えてみると、俺って、丹野久美子という、超ものすごい天才的な演出家と、それと一緒にやってた西澤という女性の演出家 2 人にしか演出されたことないんですよね。今考えると、これからもそうなのかなっていろいろ考えて

て。だからそれが、だいたい 40 ぐらいの大きな出来事でしたね。そして、好きな時に好きな連中と好きな芝居をするということで。

　そのあとかなりインターネットの時代になってきて、演劇人は忙しかったから、月に何回か集まったりとか会費を 500 円だったかな、払い続けるっていうのが大変ということになって、じゃあその時に俺が第 2 代目の会長になったんですよ。

小劇祭でその頃、きらく企画の OneLIFE っていうのがあったんですよ。そこで、OneLIFE と盛岡の風のスタジオ、あと新潟に ent.という劇場があって、その 3 つで発表してる劇団を入れ替えっていうか拠点劇場を結ぶっていう企画で、その小劇祭をやって、その時 ent.とか、風のスタジオ、OneLIFE っていうことで、３ヶ所全部回ったんですね、Gin’s Bar は。I.Q150 は新潟と仙台だけだったのかな。そうやってみるうちに、だんだんそういう小劇場がほしくなったっていうことで。I.Q150 がなぜそういうパルテノン多摩で優勝できたかっていうと、まず丹野の才能がすごいっていうのが 1 つもちろんあると思うんですけども、とにかく拠点として自分たちの劇場、仙台の東口に大谷石っていうんですか、石でできた石蔵があったんですよ。そこを定員、客席が 40 か 50 ぐらいかな、小さな劇場に改装して、もうほとんど毎日稽古して、高校野球並みに、盆と正月ぐらいしか休みないっていう感じで、そこに集ってずっと稽古をやってたっていうのがありましたね。

　そういうのがあって、とにかく自分のやりたい時にやりたいことをやるためには拠点が必要だなっていうことで、五橋の学院大の下にいろんな物件雑誌を見てたらちょうどいいのがあるなと。とにかく小さな劇場がほしいなと思ったんですね。大きな劇場はいっぱいあるので、小さな劇場だとロングラン公演ができると。大きい劇場だとエル・パークでやろうと思えば結局土日公演で。ロングランができるために小さい公演っていう、劇場ということで、探して作ってみたら、客席が 25 席しか取れなかったんですね。それ分かってたんですけども。だから、25 席だったら 100 の 4 分の 1 でクオーターかなっていうことでクオータースタジオっていう名前をつけて運営を始めたっていうのが、それが 50 代かな。

大河原：最後に、なんで、ここまで演劇続けてるか。

井伏：なんで。

大河原：なんで自分が演劇を手放さないかっていうのを飯沼さんに答えてもらっていいですか？

井伏：なんていうのかな、自分の才能に責任を持つ。って俺よく辞めていく劇団員に言うんですよ。お前は才能あるんだから、その才能は神様からもらったものだから、それを自分で使うんじゃなくて、本当に神様に返すために芝居を続けなさいよって俺よく言うんだけども、そんで出て行って戻ってきたやつももちろんいるんだけども。少なくとも芝居をやってなければ、何をやってるんだろうなっていうのがあんまりイメージできないんですよね。芝居をやることが、すごいモチベーションが高いとか芝居で何かを得たいっていうことよりかも、芝居を続けることがふつうだっていうか、自然だっていうか、芝居の現場に自分がいることっていうのが、一番自由で自分らしいなって思えるっていうので続けてるっていうのがやっぱり正直なところですね。

大河原：はい、ありがとうございました。